

# 三河アララギ

平成二十九年 2017年

八月号

第六十四卷 第八号



yuri. &

ニューヨーク日記(130) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

GRILLING SEASON

## Blue Shoe Diaries

---



マサチューセッツ州の田舎で自家製ハンバーガーを庭のグリルで!とてもアメリカな夏っぽいでしょ? 蚊さえいなければ文句ないのに。。。。

---

The grill is out! Juicy cheeseburger with fresh lettuce, tomato, onions. Eating al fresco with a ton of bug spray on 

# 目次

## 第六十四卷第八号(通卷七六四号)

表紙・ユリ	今泉 由利 (1)	牧原 規恵 (26)	重野 善恵 (35)
ニューヨーク日記(130)	Blue Stone (2)	稲吉 友江 (26)	今泉 由利 (36)
黄素馨の門	御津 磯夫 (4)	鈴木美耶子 (26)	米田 文彦 (36)
歌集「かぜくさ」	大須賀寿恵 (5)	吉見 幸子 (27)	今泉 如雲 (36)
歌集「草々」	今泉 米子 (6)	牧原 正枝 (27)	植村 公女 (36)
歌集「はゞきくさ」II	河原 静誠 (7)	石田 文子 (27)	「茶名句集」
薄日	岡本八千代 (8)	森 厚子 (27)	かさね吟行会
電波	今泉 由利 (9)	山崎 俊子 (27)	『酔いの徒然』(64)
遠出	弓谷 久子 (10)	後藤 綺 (28)	本からのあれこれ(21)
糸瓜	内藤 志げ (11)	星川 寛太 (28)	ある自然科学者の手記(63)
亡き師の教訓	林 伊佐子 (12)	秀島由里子 (28)	絹の話(81)
帰省	安藤 和代 (13)	鈴木 勝太 (28)	短歌に詠まれた茂吉 七十一回
行きつ戻りつ	伊藤 忠男 (14)	渡辺 智広 (29)	楽しい時間(57)
蕪菜	清澤 範子 (15)	堺 陽向 (29)	漢詩研修(10)
テイカカズラだ	鈴木 孝雄 (16)	尾崎 太一 (29)	雑草の名前
花胡桃	森岡 陽子 (17)	和氣 彩香 (29)	『水魚』のことから(199)
運動会	阿部 淑子 (18)	私の一首	『歴代天皇御製歌』七十八
獅子舞神楽	白井 信昭 (19)	童謡「ひまわりの咲く丘」	『歴代天皇御製歌』七十九
筋無力症	近藤 映子 (20)	高橋 育郎 (30)	『歴代天皇御製歌』七十七
夫の蔵書	杉浦恵美子 (21)	夏目 勝弘 (32)	『歴代天皇御製歌』七十八
スノーインサマー	山口千恵子 (22)	白井 信昭 (32)	『歴代天皇御製歌』七十九
ある朝の一日の始め	夏目 勝弘 (23)	森岡 陽子 (33)	『歴代天皇御製歌』七十九
歌集「夢のつづき」	水上 信子 (24)	柳田 皓一 (34)	編集室だより(二〇一七年六月)
贈呈誌	夏目 勝弘 (25)	山元 正規 (34)	三河アララギ (58)
『こよせ』	三田美奈子 (26)	山迫 京子 (34)	野菜の花(14)
いーはとぶ	水野 絹子 (26)	森岡 陽子 (35)	お知らせ・「三河アララギ」について (60)
		田中 清秀 (35)	

黄素馨の門(昭和四十一年〜昭和四十四年) 御津磯夫

島の丘に翁草さくを写ししが異国となりてうらぶれ帰りき

兵長に刈らしめし髪白かりきかの島山にすみれ咲きゐき

花のさかりながくもがなと希はねばはやく咲きたる枝はやく散る

動乱は海のかなたにのみききて咲きつぎて散る木の花草の花

おのおのに花咲き鳥のあそぶにもここにひびく人種のこと

菰の中につひに小さく弱りたる青き芽ひとつ惜しみまもらむ

をりをりに地にくだるは雀にてうてなばかりの葉ざくらの枝

明細書かきて疲るるつまとをり花の終りの夜の雨ならむ

見えぬ雨ふりゐるらしきをりふしに枝をはなれて残花おちつつ

つつみたるこころひらけて立ち去らむ花房白し君の馬酔木の

歌集「かぜくさ」

大須賀寿恵

終業のミュージック鳴り渡るとき君は転任をつひに云ひにき

三十年の年はやく過ぎ吾が辞めむ願書出す日の近づきにけり

平めし赤土の原に葉を持たず小笹は黒く花つけて立つ

どの家も芝桜の花植ゑならべ榮えし尼寺の村の面影

畳みかけし蒲団のぬくみ恋ほしくて五分ばかりをうづくまりゐる

三つにまた六つに蕾ほぐれゆき今朝貴船菊の開ききりたり

思ひ出しし一つの言葉たちまちにテレビの前に忘れてしまふ

レインコートにレインシューズに傘もちて十五夜の月の下びを帰る

五頁まで読みし給食要項をまるめ持ちつつ校門に入る

紙を折る単純作業続けきて秋の一日の静かに昏るる

歌集 「草々」

今泉米子

生きかへり診療はじめて二とせの夫の窓べのアカンサスの花

南なるわが外庭に翁草の絮を埋めたる大き鉢をおく

生り年なにあらざと枇杷の五六粒屋敷藪より夫の掌の上

クリナムの花の群立ちも百年の五葉松の鉢も十葉のなか

父母の在いましし部屋の砌には侍しやうざいふごとし小鮒草そよく

素枯れたる下より実生の冬葵ひろひて移す常滑の鉢に

まひるまの熊蟬の声とぎれつつ思ひつきたる言こと忘れたり

夏まつり昨日すみたり引馬野に透りて今年の法師蟬の声

庭にさへ出づることなし百余りの飛石覆ふメヒシバオヒシバ

井戸浚さぐらへしていよよ真清水止まず湧くいまははるかになりし父母

歌集「はゝきくさ」II

河原静誠

珊瑚樹の小さき一葉が朝の陽に赤く燃ゆるがごとく輝く

矢作川の砂に深々と埋もれて藤田木山の石柱のあり

僧風のみだれし頃に興りたる浄土律をぞ究めむとする

律院の成りし昔をしたひきて紫雲和尚の像にむかひぬ

水打ちて塵一つだに見えざりき昌光律寺の庭の笹の葉

伊賀川のほとり近くに今もなほ律風きびしき昌光寺あり

「藤田本山道場」と石文のこる大聖寺に今日また老僧の「宗史」をききぬ

出山の釈迦の画像に粥を供へ漏八の朝に梵誦す

吾を育てしいくたりの人みまかりて残りたまふは盲ひたる伯母

わが実家に帰る道さへ違へたりわれにすぎゆきし十有余年

## 薄日

蒲郡 岡本八千代

梅雨の間の薄日のままに暮れてゆく寂しからずや今日のわれはも

紫陽花の季ときもすぎつつ薄き日のほの光りの中今ひとりぼっち

水瓶にもひとりぼっちのメダカがゐるきのふの雨の濃みどりの中

ほの光りあるかなきかの薄日の中メダカも私もひとりぼっちの今

水瓶を覗のぞき見たれば動き出すオレンジ淡き小さきメダカが

いつのまにか吾も蝙蝠傘もち歩く杖の代わりにこれまた良きかな

注文の「口語万葉集」上中下薄明りの夕べわが手に渡さるる

「上」の本の帯の言葉に書かれをり「神と人の声が響き合おう」と

うす曇りのままに暮れゆくわが一日ひと鳶トビ一羽か高高舞ひをり

小田原に働きてゐる孫セイジ音沙汰遠く遠くなりたり

## 電波

東京 今泉 由利

コーヒーのカップの渦に思い馳す銀河系の出来し経緯いきざつ

千億年後のことまで知らずとも今日は知りたり宇宙の未来

時空をも越へて見えざる知らざるを見得るとなりぬ電波望遠鏡

ファゴットの音色聞こゆる王子様とお姫様との恋物語り

オーボエの高まりゆける旋律に心ゆだねて喜び至る

ステーキに大根おろしを山と盛る日本の国に暮しゐるゐる

今はまだ熟しきらざる青山椒雌株に生りて私に來し

黄緑色雄花の食用花山椒何よりも好きその名をあぐる

三本杉橋のたもとの石文の「日光御成道」を登りゆきゆく

朝な夕な片手拝みす地蔵尊四百五十年を立ちておられる

## 遠出

豊川 弓谷 久子

一年ぶりの遠出となりぬ誘はれて目指すは豊田市美術館

一抹の不安を押さえ乗る車家族全員今日は揃ひぬ

初夏の空晴れ渡り早苗田は陽を照り返し山は新緑

遠くまで黄金色濃き大麦の田の続きをり豊田真近し

玄関にて借りし車椅子面映ゆく我は乗りをり子が押しくるる

我の身に最初で最後か本物の魁夷の名画が目の前にあり

車椅子片寄せ暫し見惚れたり魁夷の世界この淡き色

ささやかな家族旅行のひと日なり生きゐる事はかくも楽しき

御津山より鶯の声透り来る梅雨とは名のみ今朝も青空

無雑作に蒔き散らしたる朝顔の芽ばえ来りぬここもかしこも

## 糸瓜

豊川 内藤 志げ

糸瓜植ゑ一日の雨を喜びぬその後は十日お湿りのなし

梅雨の雨二日続きぬ暑からず朝の歩みに爲京畑まで

日毎乗る体重計は四十三キロ五十五キロが平常なはず

散歩径藪かげ長きを行き帰り上野坂よりほてりて暑し

草苺の繁の中に高く立つ蒟蒻の花黒紫のめずらしき色

鏡台の奥の小箱にプラチナのカットの指輪わが買ひしもの

節くれの指に合はざる指輪なりし今は皺々すんなりはまる

きれ間なき雨の雫の葉のかけの沙羅の真白を廊下の椅子に

落花生栽培せしは遥かなり苗十本を翁がくれる

散歩道土手の傾なだりのイヌムギにしとどの雨露キララの光

## 亡き師の教訓

岡崎 林伊佐子

医師にして茂吉氏に学び歌詠みし亡き師の教訓いまも守りぬ

昼暗き木立の下草刈りし時石打つ鎌の火花散りけり

健やかなことのみ自慢の畑仕事とる時に汗は目にしむ

雨降りてキャベツの葉むらにおく雨滴雫を追ひて絶えざる雫

西瓜畑に受粉するとき花虻が吾より先に先導してゆく

帰省して人には会はず山猿が吾を迎える廃村集落

廃屋が昔のまむかしまに残りゐて帰省する時村人しのぶ

自動車の免許証を返納し夫の行動範囲もせばまる

自家用に育てし野菜もこの年は豊作ゆえに友に配りぬ

市街地の田圃も今年は水不足わがふる里の棚田を思ふ

## 帰省

豊川 安藤和代

新緑の弓張山脈背せなにして梨の緑の尚深く見ゆ

広き畑トラクター二台動きいて土黒ぐろと初夏の陽を

用水の水増す音のリズムよし心も踊る夏はすぐそこ

母逝きて四十五年よ長くあり短かくもあり山梔子香る

十薬の臭う指先氣にしつつ叔父の法事の席に座れり

ギョウザがいいしゅうまいがいいかつがいい日曜キッチン騒がしくあり

夏休み帰省す孫を思いつつ廊下をみがくガラス戸みがく

孫好む食事作らんスーパーにカゴ山盛りも重くはあらず

牛蛙の地をはう様な低き声聞きつ夕餉の汁の実刻む

水張田はいつしか早苗のさ緑がさやさや風に揺るるが見ゆる

## 行きつ戻りつ

大阪 伊藤 忠 男

マイワシの群れ行く波をめぐけては漁船が走るカモメ引き連れ

何も無し海と空のみ境すら定かで無しや我が目の前は

雨あるも無くとも困るこの地なりせめて荒るるを避けてくれぬか

時として乱るる脈に息切れも自覚あるとて受け止めるなり

じめじめと空気淀みて汗引かず鈍き手足はさらにさらなる

植木算旅人算に和差算と孫見る前にて猛勉強

おしゃべりな象形文字と良く言うた今や世界はマンガの虜

終活は捨てることからその筈も迷いに迷う惜しく懐かし

我よりも歳上ならん犬のフーさらに輪をかけ聞き分けの無さ

ここまでは私の人生何合目まだ目の前に急坂がある

## 蕪菜

春日井 清澤 範子

柔らかき椿の枝葉爽やかに若緑なり光りを透す

廊下のガラス越して伸び来る椿なり眼をこらせれば毛虫の行列  
痛む腰かばひながらもわが夫は椿の若葉に消毒をせぬ

今の春は菜園作らむと夫も吾も腰かばひつつ蕪菜を播きぬ

三河アララギ賞戴きてより一層の精進せむと日々に思ひぬ

蕪をまきて三日たちたり菜園の柔らかき土に芽盛り上り来る

菜園より摘みて若葉の蕪の葉を味噌汁に入る昨日も今朝も

家族三人共に腰痛医者通ひ娘吾が手を引き受付を待つ

濃き赤とピンクの日々草植えにけり腰の痛みを暫し忘れて

透き通る程に椿の新芽伸び緑濃くなり初夏の陽にゆれる

## テイカカズラだ

沼津 鈴木孝雄

日照り続き紫陽花の先端が茶色に焼けて雨乞いしている

牛臥山公園の崖に漂う芳香に近づきゆきぬテイカカズラだ

表面が濡れただけの雨なれど紫陽花の花の命つながる

百歳のわが母椅子にてうとうと和やかな顔夢みるはなに

炭焼の鰻を求め浜名湖へカラリと香ばし蒸しては出来ぬ

六年間お世話になったパソコンの手垢を落し買取に送る

インゲンのつるの伸びが速過ぎて支柱の上の用意が出来ず

ミニトマト食べ頃かと近付けば赤い実二つ鳥に喰はれて

モザイク病に耐えて残ったインゲンの実ったさやを初収穫

捕殺した虫に群がる小さな蟻赤くないかと恐る恐る

## 花胡桃

東京 森岡陽子

地下鉄にて白髪紳士のタブレット料理番組ひざで見るのは

あどけなき声の聞こゆる隣より昨日越し来た家族を思う

玄関に蛇ちよろつと現るる神の使ひと同居を決める

突然の暑さに慌て夏仕度二日過ぎしに涼しさ戻る

黒毛成る血統つなぐ競走馬フランスの騎手日本馬にのる

池のほとりにぐるり咲く白青紫あぢさい尽し

新緑の武蔵野の地に深大寺白鳳仏は今年国宝

万緑に囲まれひっそり不動尊昔は修業場湧水の滝

武蔵野の蕎麦ひとすすりふたすすり若葉風吹く二階ですする

城跡に目立ちて房の花胡桃緑さす中花うすみどり

## 運動会

横浜 阿部 淑子

障害者に伴走者着きてスタジアムタスキをつなぐ一日選手

卒寿なる夫と参加の運動会グラウンド回り青春の風

サニブラウン海外練習強豪と競いて自信実力の走りに

卓球にサッカー将棋と十代の活躍目立ちて明るき未来

久々の梅雨の雨かと思いきや車軸の雨は濁流となりて

## 獅子舞神楽

豊川 白井信昭

赤根なる萩原神社の祭礼に始まるといふ獅子舞神楽ししまいかぐら

東大塚姫塚近く素戔鳴尊神社赤根より来る獅子舞神楽

古里の大塚と赤根伝統の獅子舞神楽交流つづく

この年のこの年のみのせせらぎを生みて流れる紫川の里

ここよりは御堂山への抜道と迷わず行けるさがらの森に

駅近く御堂山へと一本道上り行く先ヒメハルロード

会場のさがらの森の人混みに見て触れ聴く一時のあり

丹野城址歌碑の見回りと峠より喘ぎつつ上る階きざはしいくつも

大楠の葉替えの濟みしみ社の若みどり映ゆ五月なりけり

潮入の浜の浅瀬のひと処今日は渡れる五月の大潮

## 筋無力症

名古屋 近藤 映子

我重傷筋無力症右眼開らかず右半身のしびれなり

六月十九日の検診日ただちに入院となる神経内科

リハビリの始まり一週間二週間となるらし早くも

リハビリの終れば体はぐったりと食事そこそこ寝入たり

杖付きて一人歩きの出来ねばならぬリハビリ必死に始めたり

看護師の手のだんぐ減るのは快復のきざしか余り変らぬ今

後一週間にてどれだけ動ける様に成るのか気持あせれり

「重傷筋無力症」症状悪しき進みは速やけれど快復時間の長き事

早めの手当三度目のこの症状は何時頃消えるか

神経内科の安藤先生何時も走り足にて病室検診に

## 夫の蔵書

蒲郡 杉浦恵美子

特に何もすることなければ日曜日に苺ジャム煮る今夏二度目の

命日の今朝カーテンを洗濯す夫よわたしは家事してゐます

赤茶けし経年劣化の背表紙が並んで居りぬ夫の蔵書は

読む当てはなけれど迎も捨てられぬ手書きの背表紙夫の蔵書を

手に持てば厚手の新刊温かし携帯読書に換へ得ぬ触感

母亡き世四半世紀も経ちました我が返答に息呑む気配

この家に独り暮せる我が身をば思ひ知りたり母への電話

居ぬ母に電話呉れたる人のこと語る相手のなきぞかなしき

長良川木曾川の間堤防を行けば川風西から東から

昭和まで堀田ありたる三角州木曾長良川流れの果ては

スノーインサマー 豊川 山口千恵子

ドグダミの白き花咲く庭の隅絶えることなく年毎に生えくる

一とせに一たびのみあふ白き花庭に咲きゐる十葉にくまず

よく見れば美しき白き花の様十葉数本ビンに挿したり

サボテンに小さき赤き花の咲く今年もおもふ母逝きし頃

濃きみどりに色変はりゆくを樂しみつつ青々ニラを炒めつつゐる

皿に盛るニラのみどりと卵の黄色美しきと思ひつつ樂し

大木を白く彩り咲く花をスノーインサマーと教えてくれたり

歩き行くわが足音に飛び立ちぬ麦の刈り跡あさる野鳩ら

穫り入れのすみたる麦の広き田にうごめく鳩のおびただしき数

忽ちにあたりの田植を終りたり姦ましかりし蛙も鳴かず

ある朝の一日の始め  
豊川 夏目勝弘

午前二時起き出で中天を仰ぎたり最も小さき満月を確認

いと小さき満月なるも月光は皓皓として厳かなり

静かにしずかに眠るネムノキに今夜の満月の光は優し

いと小さき満月を仰ぎさて己の命の朝食の支度

玄米を炊きし吹き溢れを拭ひ取るテレビは幾度も見しSLの記録

一時間かけて朝食の支度を終ふ血圧を測り次は朝風呂

室温は二十四度と高目なり血圧記録簿に記入をする

今はもう病にかからぬ御魂の父母玄米飯にてお許し願ふ

起き出でて三時間にてこの朝の仕事は全て終りとなりぬ

散歩より帰りきたりてズボンの裾の黄緑色の草の種を除く

歌集 「夢のつづき」

水上信子

りんご売る少女のほおはりんご色つやつや赤しほのほのやさし

身を飾り集う祭りの華やぎに踊るも見るも一つの宇宙

村人の衣装美し秋祭り若き僧らの舞う晴れ舞台

奥深き寺院の中の暗やみにわが身の末を思うたまゆら

雨花石という南京産の色石は水に沈めて愛ずるがよしとや

旅先の思いこもごも石の数石は語らず箱に静まる

懐かしみ旅の思い出にとればブータンの石真砂煌めく

那智黒も熊野大社の玉石もひそかに拾いてわがものとなす

山男の土産はいつも石一つ思い出箱に交じりてありぬ

瑠璃色は空の色よりなお深くハルリンドウは地にありし星

贈呈誌

夏目勝弘

青森アララギ

○カタバミの花の群落は何年前今はただ羊歯の茂れるのみに（第四百号 野澤則夫）  
○あと半月この用終へなば草取りせむまづ丈のばすヒメジョオンから（第四百一号 竹洞早苗）

鹿兒アララギ

○葉草のドクダミ数多生えみたり小花愛しみなべて刈り取る（9月号 郡山繁幸）  
○庭の草とりてくれしシルバーさんこぼれ種のトレニアも残してありぬ（11月号 市来菜）  
○山桃の落葉掃く庭に千両の実は色づきて秋の深まる（12月号 重盛ヒサ子）  
○蓬摘み喜寿を迎ふる妹にケセン団子を作りて送る（1月号 市来房枝）  
○明け方に目ざめて聞くは山茶花の蜜吸ふ目白の番なるらし（2月号 上原泉）

冬雷

○庭隅に百日草の蒼群れ朝は東を夕は西向く（9月号 糸賀浩子）  
○宙づりに石垣の草取る人と濠の小舟に待機する人（12月号 森藤ふみ）  
○長雨の過ぎたる朝黄金の光放ちて菊いもの花（1月号 立谷正男）  
○秋草は種が成るから早く抜けそれが出来ずにこぼれて枯れる（2月号 加藤富子）  
○電子辞書と雑草除去の費用同額にて歌を優先とす放棄せる庭（3月号 関口正道）

柀

○庭隅の秋明菊のこぼれ種何時ごろよりか赤き花咲く（十二月号 大久保京子）  
○庭隅の藪蘭の花ひとにぎり飾りてひとりの遅き朝餉す（一月号 腰山きぬ子）  
○生前に母の植えくれし秋明菊今年も咲き継ぐ花あまたつけ（二月号 岡田節子）  
○ジャガイモの生きる定めか寒に入り箱一杯に新芽出揃ふ（三月号 林勇二）

秋楡

○渴きには強いと聞きしゼラニウム九月の雨に負けてしまえり（第90号 坪根恭子）  
○突風に落葉ハラハラ道行きと地上にあらぬかすかに声が（第91号 春日井英子）

『いじやよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

ペアルック着てゐるやうな二羽の鳩襟元あたりの紅色愛らし  
忘れ潮の中の小さき魚たちと戯れし日のなつかしきかな

三田美奈子

早世のあの子の家はそのままに庭の甘夏たわわに実る  
電柱の天辺にある鴉の巢今日除かれゆく鴉の子あはれ

水野絹子

石垣にビニール張りて即席の苗床作りて春苗育てむ  
末孫の運動会を見に行けり今日は三つの印あるのみ

牧原規恵

背戸径をのっそり歩くノラ猫のお腹の膨らみ気付きて愛し<sup>かな</sup>  
お互ひに楽しき話題に通じ合ふ夜の九時すぎの子らとの電話

稲吉友江

肩までにカットのわが髪ふうはりと今朝の緑の風に吹かれて  
「クチナシの白い花」などと夫歌ふ庭にクチナシ白き三つ四つ

鈴木美耶子

六度目の五月人形に会ひに来し幼はシテイボーイとなりつつ  
藤まつり協賛花展に新緑の八重のこでまり主役に生けたり

吉見 幸子

歩道にぽっぽっぽつと人並ぶ「大学行き」は春の行列

十年後の我に届くとふ手紙書く今の家族に遺書めいてゆく

牧原 正枝

初夏や気温の変るこの日頃衣更へなる言葉遠のく

雑草に混りて咲けり蒲公英の綿毛フアフア今日吹く風に

石田 文子

道の辺に白々そよぎし茅花の穂今はいづこか三毛猫チロは

梅雨の夕べ吾が家に初めて猫のきてそのまま十六年三毛猫チロは

森 厚子

黄昏の富士は薄墨ひくごとし吾がひとり旅暮れなんとする

七年と仕事に使ひしわがパソコンクリーンセンターのま暗き穴に

山崎 俊子

## 現代学生百人一首

東洋大学

「しわくちやだ」並ぶ手の甲見比べる祖母の言葉に人生を知る

山形県酒田光陵高等学校三年 後藤

綺<sup>あや</sup>

夜ご飯じいちゃん作る芋の子を「け」と言われると僕は「く」という

山形県立新庄神室産業高等学校真室川校二年 星川

寛<sup>かん</sup>太<sup>た</sup>

分らない君の気持ちも数学も参考書にも答えはなくて

福島県立会津高等学校一年 秀島由里子

あと四年オリンピックがやってくるクラスの中にもスターの予感

福島県立平工業高等学校二年 鈴木勝太

選挙権初めて投票してみたがまだ私には早かったみたい

福島県立平工業高等学校三年 渡辺 智広

体育祭走ってころんで傷だらけ元気なゾンビがどんどん増える

茨城中学校一年 堺 陽向ひなた

サッカーで頑張ったのは僕だけどあいた靴底君のおかげだ

東洋大学附属牛久中学校一年 尾崎 太一

母の字で埋めつくされた母子手帳読んであふれる涙と感謝

宇都宮海星女子学院高等学校一年 和氣 彩香わきさいか

童謡 「ひまわりの咲く丘」

高橋育郎

ひまわりの丘は おひさまの丘

明るくまばゆい ひかりの丘

ひまわりはおひさまが 大好きだから

うれしくなって 友だちになりました

小鳥もいっしょに よろこびの歌をうたっているよ

ひまわりの丘は いつもニコニコ

笑顔が大好き 元気な丘

ひまわりはひかりの輪 輝きの花

朝から晩まで おひさまと歌います

みんなもいっしょに しあわせの歌をうたいましょう

ひまわりの丘は 青空の丘

見あげてみようよ 高い空

天使たちがとんでいる 呼んでみよう

つばさをひろげて 舞いながら降りてくる

しあわせの 花束の香に包まれましょう

「ひまわりの丘は 悲しみとお別れする丘です

あしたのよろこびを 迎える丘です

みんなでとこしえの幸を 祈る丘です」

## 私の一首

今ここは確かに日本の国ならむ中国語の会話のなかを行く

夏 日 勝 弘

今回の旅の目的は、若草山の千年余の山焼きによって、形成されたクロボク土と、いま住んで居る土地のクロボク土とを比べてみたかったが、若草山が閉山中のため、旅の目的が叶わなかった。

仕方なく東大寺に回り帰ることにしたが、東大寺は修理中のうえ、観光客の多くは外国人ばかり、なかでも中国からの団体が、道一っぱいに並び大きな声で話しながら通っていく。たまに日本語の会話が聞こえると安心をするほどであった。

宇治川の小鮎<sup>ばし</sup>さ走る<sup>たぎ</sup>激つ瀬<sup>たぎ</sup>に人麻呂思へり網代木の歌に

白 井 信 昭

壬申<sup>じんしん</sup>の乱（六七二年）の戦場ともなった宇治川。とうとうと流れる浅瀬、ためらう波に躍<sup>おど</sup>る小鮎達を見ると、万葉歌人柿本人麻呂が詠んだ網代木の歌を懐かしく思い出した。

♪ララランド♪これぞミュージカルアメリカン青春期のあの映画偲ぶ 森岡陽子

ザ・ミュージカル ♪ラ・ランド♪を友人と見る。若い頃 ♪ウエストサイドストーリー♪も同じ友人と。直ぐあの頃の青春時代に戻り、ミュージカルの強烈な印象の映画だったと……思い出話。幼稚園・中・高と一緒、今でも一ヶ月に何回かはランチ、買い物、映画、旅行にと出掛けるもこの頃はつつい昔話に花が咲く。年のせいなかな？ミュージカル映画を心から楽しんだ一時だった。

『俳句』

深大寺句碑のおほよそ木下闇

柳田皓一

樹上には鴉の子の巢あるらし  
湧水のとどまるところ花菖蒲

熊除けの鈴鳴らしゆく木下闇

山元正規

花合歡や山の日暮は俄かにて  
ほら穴に祀る観音岩清水

近道は草の茂みに覆はれて

山迫京子

開け放つ厨を隠す夏のれん

木下闇抜けて富士山見ゆる丘

山寺の参道細き木下闇

森岡陽子

山里に廃屋並ぶ木下闇

夕立やみくじは吉と泣き不動

苔の花葉裏のしづく集めけり

田中清秀

雨上がり水輪を残すあめんぼう

親ともに嘴太き烏の子

花菖蒲小田原城の裾模様

重野善恵

木下闇よくぞベンチの置かれたる

さながらに行軍の如蟻の列

天竺に思ひを馳せる花櫛

今泉由利

すつきりと釈迦如来の夏衣文

草取りを鴨にまかせた田圃かな

遠くより声のかすかに木下闇

米田文彦

禅僧の節くれし手に打たれし蚊

うたたねにいつか移りし端居かな

ややこしき城下の地図や青時雨

今泉如雲

八甲田ふはと越えたり山背雲

ダムの奥には白神や苔の花

繰り返す挨拶長しあいの風

植村公女

故郷や同じところに羊蹄花

これからは誰の卒業机かな

「一茶名句集」(大正十一年一月廿五日発行)

草雫今こしらへし涼風ぞ

涼風やちから一ぱいきりぎりす

朝涼や汁の実を釣る背戸の海

正直に入梅雷の一つかな

五月雨も中休みかよ今日は

夕立やはらりと酒の肴ほど

# かさね吟行会

## 「深大寺」 六月

田中清秀

深大寺という名前は水神の深沙大王（じんしゃだいおう）に由来し天平五年（七百三十三年）に満功上人によって開山されたと言われている。従って正式な名称は深沙大王寺である。平成二十九年六月九日、この武蔵野の由緒ある深大寺周辺を吟行した。

境内は、茅葺きの古い山門、阿弥陀如来を安置する本堂、天台宗中興の祖と言われ厄除けの元三（がんさん）大師を祀る大師堂、通称「白鳳仏」と言われる金銅釈迦如来倚像の納まる釈迦堂、立派な梵鐘を吊す鐘楼など多くの仏閣が配されている。また、深い緑に囲まれた広い境域にはムクロジの木やなんじゃもんじゃの木など見所が多い。図らずも聞こえた鐘の音は句心をかき立てる。

万緑や一山を撞く鐘の音

正規

鐘撞くや若き僧侶の夏衣

勝信

山門の古き書額や夏木立

清秀

深大寺といえど何と言っても蕎麦である。その昔米の生産の少ない土地柄から米の替わりに納められたそば粉を寺では豊富な湧き水で蕎麦を打ち、来客をもてなしたという。今では参道周辺に二十店を越える老舗の蕎麦屋が並び平日でも賑わいを見せている、石挽きの上品な細い白蕎麦が特徴である。

紫陽花や娘が招くそば処

素山

童顔の白鳳仏や若葉風

皓一

白鳳の世にわけ入りぬ木下閣

由利

釈迦堂に納まる白鳳仏は明治四十二年に元三大師堂の檀下から発見された。関東最古の仏像で国宝に指定、作成年代は深大寺創建以前と言われている。微笑みを浮かべ流麗な衣をまとった倚像（いぞう）は素朴でシンプルな美しさに満ちている。この像がどこから伝来し深大寺との関係はどうだったのかは未だ謎に包まれている。

また、風情豊かな環境は多くの俳人や歌人に愛され、明治大正にかけて寺主催の俳句会が催された。境内に松尾芭蕉を始め高浜虚子、中村草田男など著名な俳人の句碑がいくつか建っている。霊験あらたかなこの地は新しい着想やひらめきのわく俳句のパワーポイントなのかも

しない。

縁差す大門くぐり虚子の像

どくだみと呼ばれし真白十字かな

京子  
周二

更に寺院の奥まった祠には大石に刻まれた延命観音が  
ある。これは秋田県湯の海底から偶然発見され、慈覚  
大師自刻の観音像とわかり奉安された。隣接する神代植  
物公園近くには開創一千二百五十年の大法会に合わせて  
建築された開山堂もある。向かう途中には万霊塔が高く  
そびえ愛犬愛猫の霊筐が納められている。この本尊は  
十二支観音で多くの動物諸霊の冥福を祈っている。

洞穴の延命菩薩や苔の花

新緑や天つくペットの供養塔

陽子  
礼子

現存する深大寺絵巻によると、この寺を開いた満功上  
人の父親福満はこの地の豪族の娘に恋をする、娘は父親  
の反対で湖の小島に流されてしまう、何とか結ばれるよ  
う水神の深沙大王に祈願すると霊亀が現れ、島に渡るこ  
とができ恋が成就する。満功上人は父福満の報恩の願  
いを果たす為、この地に小さな庵を建て深沙大王を祀った。

さらに、深沙大王のお像を祀りたいと念じたところ白蛇  
のお告げで桑の神木が流れ着き、ご神体を刻み深沙堂に  
安置した。このご神体は秘仏中の秘仏で住職一代につき  
一回しか拝むことができない。この縁起については「住  
職がつづる深大寺物語」に詳しく書かれている。この由  
来から深大寺は縁結びの寺として有名で、恋人同士が参  
拝し愛を誓い深大寺そばをふたりで仲良く食べれば幸せ  
な夫婦となるは間違いない。

閑話休題、句会は山門近くの「八起そば」の二階を借  
り、囑目三句の句作に入る。果たして深沙大王の霊験は  
俳句にも現れてきたかどうか。昼食は件の深大寺蕎麦を  
食べながら楽しい時を過ごす。散会后、三々五々近くの  
水生植物園まで足を伸ばして花菖蒲や半夏生の生い茂る  
水辺の散策となった。

■かさね吟行会■

日時 八月十一日(金)

場所 東高根森林公園

集合 南武線溝の口駅改札口十一時集合

申込 森岡陽子宛 (03)3712・2835

## 『酔いの徒然』（六四）

丸山 酔宵子

ている。これも商標権の問題で致し方ない問題であろうが寂しい限り。その代わり、ピチピチのチアールがビートの効いたリズムに合わせて動き回っている。

『早慶戦今昔』

「若き血に燃ゆる……陸の王者慶応！」「紺碧の空……早稲田早稲田！」5月晴れ満員の神宮球場は両校の応援で熱気むんむん。昨日の一回戦は慶応の満塁本塁打2本で、早稲田は無残な敗退。今日も負けると慶応の久々のリーグ優勝を眼前で見ることになり、早稲田としては絶対に一矢を報いねばと背水の陣である。

思い起こせば、一昔前の早慶戦と比較すると、デジタルとアナログのように決定的に応援の仕方が違う。先ず、慶応応援団には、大きなミッキーマウスの看板が無い。早稲田にも、お馴染みのフクちゃんの大看板が消え

早慶戦となればチケットがなかなか手に入らず、前日から麻雀セットを持ち込んで入り口付近にならび外野席でも確保したものである。その当時、外野席は芝生のままで、仲間と一升瓶を持ち込んで、スルメやイカを肴に午前中から大宴会。午後1時の試合開始にはみんなへべレケ。ある強者は、酔ったついでにバックスクリーンによじ登り、てっぺんから大声で「あにき……元気かー」と、NHKのテレビカメラに向かって手を振っている。「おい危ないからやめろよ」と引きずりおろそうとすると、「札幌にいる兄貴に挨拶してるんだ！」早稲田にチャンスが来ると、応援団指導の下、「さあー、みんなさん、タバコを吸って一斉に、煙を吐いてください。慶応を「煙

（けむ）に巻きましょ！」煙が大きな塊となり、一斉に  
天空に舞い上がる。今では到底考えられない馬鹿々々し  
さ・・・。

早稲田のリーグ総合優勝ともなると、神宮球場から早  
稲田のキャンパスまでの提灯行列が思い出されるが、極  
めつけは新宿での優勝大乱痴気騒ぎである。至る所で学  
生同士肩を組み、大声を出してジグザグデモで車を止め  
たり、はたまた、歌舞伎町の新宿コマ前の噴水では酔っ  
ぱらった学生たちが真っ裸で奇声を上げている。無礼講  
とは言え、今では考えられない無節操で、恥ずかしく思  
い出すのである。

「おいおい、上から変な匂う汁が落ちてきたぞ・・・」  
と上を向くと、バックネットの電線に神宮球場名物のハ  
トが五羽一列に並んで悠々と休んでいる。「ウエー糞だ

よ、やられた。くせーなあー。やばいよ。退散、退散：。」  
戦果は早稲田の大逆転大勝利、「早稲田の栄光」でいざ  
乾杯！

### 紺碧の空に雷雲鳩の糞

酔宵子

## 本からのあれこれ (21)

米田文彦

### 「時の流れ 2」

もう少し、江戸時代末期から明治にかけての日本海交易について見てみたい。

北海道から日本海、瀬戸内に入って大阪までのいわゆる北前船が運び込んできたもののうち、世の中に大きな影響を与えたのは「昆布」なのである。北の海産物は関西に入って、例えばニシン蕎麦、塩昆布に至るまで工夫され浸透していくが、昆布は中国への輸出品として欠かせないものだった。元禄の頃から幕府は銅銭など銅を輸入し、海産物（干しアワビ等の俵物、および昆布）を輸出品に充てている。そして、この幕府の表ルートとは別に、薩摩藩の密貿易が有名である。

昆布は当時の中国に大変喜ばれていた。昆布は当時の中国になかったヨード分を多量に含んでいたからといわれる。そして、地理的に近い琉球は以前から清に昆布を献上し見返りに高価な唐菓種を得ていた。

薩摩藩はそこに目をつけた。琉球奄美から運上させた黒

砂糖を対価として昆布を買い付け、輸出し、菓種を輸入するという密貿易である。立役者は薩摩藩家老・調所広郷であった。

江戸時代も後半になる頃、薩摩藩は財政破綻寸前だった。天保年間に家老であった調所は財政再建に踏み切り、五百万両という借財返済として無利息、二百五十年年譜という事実上の踏み倒しを断行した。一方、増収策として藩を挙げて琉球を中継地としての密貿易に踏み切る。調所は密貿易の嫌疑を受けて切腹するのだが、最終的に薩摩藩は五十万両以上の蓄財に成功し、それは島津斉彬の先進的開明政策による、ガラス、鉄鋼、軍需産業育成の基盤となり、藩は倒幕へ進むことが可能になっていく。この密貿易のタネである昆布、菓種の国内運搬に大いに貢献したのが富山の菓売りなのである。

薩摩藩が蔵屋敷などで昆布を大量に買い付けなどしたら目立ってしまう。そこで船を持つ薬商人が越中越後などで細かく買い付け鹿兒島へ運んだ。

密貿易船が難破して露見したり、太平洋を漂流してしまったことなどの記録も残っている。

このように薩摩の密貿易は幕府の長崎俵物会所と商売として衝突するわけだが、小廻りが利いて品質の良い薩

摩に軍配があがった。

輸入された薬種は、結局、薬売り一人一人により背中に負われ、全国の家庭に販売されていく。

ちなみに、越中富山の薬売りは家庭に薬を置いてゆき、また来るのは来年。代金はその時に過去一年間に使った分だけを払えばよい、というシステムはご存知のとおりであり、薬売りの持っていたお客様台帳（掛帳）は近代になっても高い値で企業に買い取られたという。情報の固まりという訳だ。

このように見てくると、北海道と鹿児島を昆布と薬によつてつないだ富山の商人の姿が浮かび上がり、前号に書いた家の当主が運送手段近代化の流れにある世の中にあつて、業態転換を図ろうとしたときに、何故、一見無関係に見える薬業界を考えたか、鹿児島に代理店を設置しようとしたか、が臍氣に見えてくるのだ。

結局、この家は太平洋戦争により跡継ぎたる長男を失い、戦後の農地解放により小作からの収入もすべて無くなり、存亡の危機に立たされる。

それでも時の当主は残されたものすべてを懸けて銀行業への転換を図る。社会構造はまだ流動的、何が良い選

択であるのか皆が模索の世の中である。大蔵省認可を得るに上京陳情も幾たびか、惨憺たる努力の末、結局、この奮闘は結実し戦後の日本における最小の普通銀行として誕生し、激動の戦後から平和の時代へ地域経済の一翼を担い続けていく。

何故、終戦後に家を存続させるために銀行業を目指したのか？船による交易とは関係ないように見える。

ここで大正期以降の北前船、土地のバイ船の家の転換業種を調べてみると、蒸気船をもって近代的船主になった家も勿論あるのだが、銀行業へ転換した家も案外多かったという研究がある。背景としては、①船の交易商売の実態として遠隔地間の手形決済機能を担っていた、都会のような両替商は無かった、②蓄積された資産と信用の下で実質的に土地の金融機能を担っていた、ということが考えられている。

テレビで活躍する大和田伸也・猿兄弟の実家も福井敦賀の船主だったが、大正期に大和田銀行となった。

それぞれの時代に必死に生き残りを模索する人々が、無関係には見えても実態は何らかの繋がりがある道を選んでいく姿が浮かび上がってくるのだ。

## ある自然科学者の手記 (63) 大橋望彦

### 第三章『老年期時代』

#### 1) 「和洋女子大時代」(H4・4・1〜H12・3・31)

「仕事の転換」は定年退官に始まった。

定年退官して、実験室のある研究室を去り、暫くするともはや実験をする場所のないことに気づく。今まで研究所しか知らなかった者にとつては、研究の終了を意味する。そこで今後は研究以外の生活を見出して行かなければならない。従来考えたこともなかった事態に気づいたのだ。

ちょうどその頃、和洋女子大学から非常勤の講師をして欲しいという話があり、教鞭をとることは一つの道かもしれないと思ってお引き受けしたのである。「化学」を講義する人がなかなか見付からないので是非お願いしたいとのことであった。大学一年生の二組と短大生の二組で前・後期週二日四コマの講義であった。次の年から、更に全学対象の特別講義として「老化と癌化」の講義を追加された。三百人を対象にして、数台の大型テレ

ビ付の大講義室で講義するのはそれほど辛いことではなかったが、大変だったのは、全員の試験をした後の答案をチェックしなければならぬことであった。それに、週六コマの講義は、常勤の教授でも稀な事で、少し多すぎた。六年間続けたが、流石に奥多摩から通うのに疲れが出てきたので、後輩を紹介して、退任させて頂いた。

#### 2) 癌研中央検査部顧問とのぞみ看護学校講師

退官と同時にもう一つ始めたことにやはり教育関係があった。

癌研の中央検査部の顧問として部長のアドヴァイサーという役を西病院長(当時)から仰せ付かった。病院の顧問役は名誉職で、給与が原則として出せないの、申し訳ないから、附属の看護学校も一緒に面倒と見てほしい。そうすれば、そちらの方から給与を出すことが出来るので多少は足しにして頂けるでしょうと言うことだった。最初は学校も准看護婦の養成学校であったが、次第にこの准看護制度が問題化してきたので、癌研では逸早く、全日制の「のぞみ看護専門学校」に改変し、殆どの学生は寮に入って、本格的に教育される学校になった。始め

のうちは、「生化学」の講義を受け持っていたが、いかにも学生の質が低く、随分手こずった。講義のこま数も多く、時間がかかるため、勝手を言つて、「生化学」は栄養の先生にお任せして、小生は「臨床検査」の講義をすることとなった。この「臨床検査」はどういう訳だか、「病理」の一部に属していたので、いつの間にか病理の先生になってしまった。それでも教える内容は、殆ど生化学に近く、栄養の先生の生化学よりも実用的な生化学に転じた感じがした。それに全日制になってからは、学生の質が上がり、入学試験の競争率も上がってきたので、年々優秀な学生が全国的に集まつて来るようになった。今では、「おじいちゃん先生」と言われている。どうやら学校の中での最長老であるからだろう。来年(H17・3)に癌研が全部有明に移転することとなっているので、其れを潮に退職するつもりでも有る。

### 3) 完全にフリーの身となる

癌研を退職すれば、もはや学問から完全に離れることとなるので、全ての学会からも退くつもりであり、其れは完全に自由なフリーの身となる。

結果的には、すでに、数年前にこのような状態を予測

して、<sup>ウヰルグ</sup>悦鹿<sup>ウヰルグ</sup> という工房を創り、木彫を一から独学で始めてきたのである。二十年前に犬や鼠の粘土細工をしてみたことはあるが、木彫は小学校時代に飛行機のソリッドモデル(木を削つて造る模型飛行機)を削つたのが初めてで、中学校以降は一切彫刻刀を持つたことがなかった。其れがいまや、木を彫つて、浪漫の世界に飛び込んだのだから不思議である。

小生の心の中に潜在していた浪漫の世界は、実は次の小生が感激したエッセイを思い出したときに始まつていたのかもしれない。余り上手い訳ではないが。

「Die Natur setzt alle Augenblicke zum laengsten Lauf an.  
<sup>デ、イ、ナトゥール、ゼット、アレ、アウゲン、フリュック、ツウム、レエンゲステン</sup>  
<sup>ウント、イスト、アッレ、アウゲン、フリュック、アム、ツァイ、ア</sup>  
Und ist alle Augenblicke am Ziele.  
<sup>エ、オ、ハン、ゾ、アル、ガング、フオン、ゲ、エー、テ</sup>

— Johann Wolfgang von Goethe —

(自然は、究極の果てまで全て瞬時に繋がつていて、そして、自然は、全ての瞬時を目的の所にまで到達させている。)」

## 絹の話 (81)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

### 「絹の後練り、先練り」

絹は繭のどの部分を使うか、後練りか先練りかで織物の柔らかさ硬さが大きく異なります。

大別して、長繊維として繭から揚げた糸（現代の繭からは1500m前後とれる）を何本か合わせて糸にして、よく精練（繭糸の外側に付いているニカワ質のセリシンをとる、練るとも言われる）された物は艶やかで、さらりとして張りがあり、「これぞ絹！」なのですが、絹に不慣れな人からは麻ですか？と聞かれる事があります。長繊維をとった残りは繭糸が切れていますので、短繊維として絹紡糸（紡ぎ糸）にされます。

糸の撚りのかけかたにもよりますが、艶は長繊維の物より劣ります。空気を含んでいて暖かく、木綿タッチでソフトな柔らかさがあり、一般的には喜ばれます。

### 【後練り織物】

#### ○羽二重はなぜ柔らかいか

よく世間では赤ちゃんのほほをなでて「羽二重の様な

肌」という様な表現をします。しっとりしていて、柔らかくしなやかな物に出会った時に使われます。

多くの人が抱いている絹のイメージなのでしょうが。

絹織物は先練りか後練りかで、しなやかさの性質が大きく違って来ます。

羽二重を作る時は繭から揚げた糸（生糸）をニカワ質のセリシンが付いたまま、糸に撚りをかけず、水でぬらして強く張った「たて糸」に、同じ様に撚りのない生糸を「よこ糸」にして緻密に織り上げると、硬直してゴワゴワした織物が出来ます（生機…きばた）。それを石鹼や炭酸ソーダ、ケイ酸ソーダなどでの精練液で煮沸するとセリシンが溶けて除去され、今まで固くくっついていた細くて長い糸の繊維の束の1本1本が動きやすくなつて、やわらかい織物が出来ます。これが後練りという技法です。

この技法で身近な物に縮緬やクレープがあります。

縮緬は生糸を「たて糸」にして、「よこ糸」に互いに撚りの逆向き（S撚り、Z撚り）の強撚糸を2本ずつ交互に織り込んで作ります。織り上がった生機はセリシンのニカワ質が付いているのでゴワゴワしていますが、精練するとシボのある柔らかいくサラリとした生地が出来ます。

同じ後練りでも随分感触が違います。

他にクレープデシンや光沢の美しさを強調した物に生絹（きぎぬ）朱子、輪子、サテン等があります。

### ○富士絹のやわらかさとの違い

よく羽二重とやわらかさを比較される絹に富士絹がありますが、富士絹は生糸を採った残り糸を細かく切って、絹紡糸として木綿の様に織った物で、空気を含んだ柔らかさで、ぬめり感が違います。

### ○後練りの化学繊維への応用

絹に限りなく近づけようと絹織物の後練り技法を応用した化学繊維にポリエステルがあります。

### 【先練り織物】

先練り織物は生糸を精練してから織るのですが、生糸をそのまま精練するとはげばだつてしまい、織りにくくなるので、生糸にあらかじめ撚りをかけてから精練して、セリシンのない絹糸（練り糸）を「たて」「よこ」に使って織り上げた物が先練り織物です。

ブロケード、錦織、緞子などの美術的織物、サテンや素朴な紬など、多くの絹織物は先練り織物ですが、糸の練り具合と、糸の撚りの掛け方で硬軟、織物の風合い（ぬめり、シャリ感、こし、張り、膨らみの強弱等手触

り、光沢、色、ドレープ性、絹鳴り、衣ずれ、視覚等の人の心に触れる官能、など）が大きく変化します。さらによこ糸に太い糸など入れれば千差万別に組み合わせが可能で、限りなく幾種類もの織物が出来ます。

また、練り糸を染色してたて、よこに織ると縞、格子、緋、各種多色模様など多種多様な先染め織物になります。後染め織物には手描き、型染め、絞り、木版プリントなどがあります。

### 【産地の違い】

後練り織物と先練り織物では精製に適した湿度が違うため、比較的湿度の高い日本海側に後練り織物産地が発達し、内陸側に先練り産地が形成されました。

### 【人類5千年の絹への切磋琢磨の結果】

人が絹と取り組んで5千年の間に、糸づくりや織りの多様さには目を見張る物があります。また、うすい物を織らせたらインド、ドレープのしなやかさを表現するのはイタリアなどそれぞれの国で特技があります。

絹文化を「世界共通の絹文化遺産」として国連に登録できないものでしょうか。

### 短歌に詠まれた茂吉

—あるいは茂吉を詠んだ歌人— 七十一回

「月虹」 鮫島 満

### 二十 扇畑忠雄 2

茂吉の忌近づくと二月の寒き日を翳深きデスマスクに  
対す 「群山」平成三年

憲吉と茂吉文明三つながらみ葬りに侍りしえにしを  
思ふ 「あをば」平成三年

文明の告別式を終へしち青山墓地に茂吉の墓訪ふ

同

作者が師と仰いだ右の三人の享年は次のとおりである。

斎藤茂吉 七十二歳（一八八二～一九五三年）

中村憲吉 四十六歳（一八八九～一九三四年）

土屋文明 百一歳（一八九〇～一九九〇年）

一首目「茂吉の忌」は昭和二十八年二月二十五日。結局によつて山形県上市市の斎藤茂吉記念館での作とわかる。二首目で作者は右の三人の師の葬儀に参列したと詠んでいる。三首目で文明の告別式の後、東京の青山墓地に茂吉の墓に詣でたというのは作者が仙台に住むからで

ある。

みちのくの五月の峡の新緑みづみづし茂吉の生れし  
日近く 「短歌研究」平成五年

「死にたまふ母」の季節といふべしも翁草咲けりを  
だまきも亦 同

時疾し四十年は過ぎにぎと寒かりしみ葬りの日を思  
ひ出づ 「斎藤茂吉追慕歌集」平成五年

茂吉の生地、山形県上ノ山を訪ねた時の作であろう。一首目は「みちのく」の新緑の中で茂吉の生まれた五月十四日（明治十五年）が近いことを思ったのである。

二首目は、五月といえば茂吉の生母「いく」が亡くなつた二十三日も思われるというのである。茂吉が母の死を「死にたまふ母」五十九首に詠んだこと、その中には、「死に近き母が目に取りをだまきの花咲きたりといひにけるかな」「おきな草口あかく咲く野の道に光ながれて我ら行きつも」（『赤光』大正二年）というような親しみ深い花の歌もあつたと思ひ出しているのである。

「逆白波」茂吉自筆の原稿を硝子へだててしばし見  
てをり 「群山」平成六年

たまはりし花梨の実一つ匂ひたる大石田の夜を吾は  
忘れず 「斎藤茂吉追慕歌集」平成六年

毛筆で原稿書きし茂吉先生明治も大正も遠くなりたり  
「群山」平成七年

一首目は上ノ山の齋藤茂吉記念館での作であろうか。そこには、茂吉が大石田で詠んだ「最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりにけるかも」を記した原稿が展示されていて作者の思いを誘ったのである。

二首目は本誌の前号にも関連する一首を紹介したが、大石田に茂吉を訪ねた時に花梨を貰ったことが殊に忘れられないのである。

莫産しきて茂吉の昼寝せし跡か塩の沢観音堂の縁古  
びたる  
「短歌」平成七年

大石田滞在中の茂吉は実によく近隣を散策している。多くの場合、身辺の世話をしていた板垣家子夫やその息子が付き添ったが、塩の沢観音堂には茂吉一人で行くことが多かった。大石田での作品を収録した歌集『白き山』の最後を「塩沢」と題する五首で終わらせるほどに愛着ある所であった。ここには、「あさぎりのたてる田づらをとほり来て心もしぬにわれは居りにき」「ひとりにて屢も来し塩の沢の観音力よわれをな忘れそ」という心のこもった歌が含まれている。

海草の湯浴む茂吉の歌ありき海草療法といふにやあ  
らむ  
「群山」平成八年

この歌は、茂吉が昭和三年五月に友人の阿部次郎を仙台に訪ねたときに詠んだ「さ夜ふけと更けわたるころ海草のうかべる風呂にあたたまりけり」(『ともしび』)に触れて、のちに流行った「アルゴテラピー」との関連を思ったという内容である。

阿部次郎は茂吉と同じく山形県に生まれ、哲学、美学を講ずる東北大学の教授であった。作家としても『三太郎の日記』で知られる。この時の茂吉の歌には他に「朝がれひ君とむかひてみちのくの山の蕨を食へば楽しも」「わがこころ和ぎつつあたり川の瀬の音たえまなき君が家居に」などがある。

日 年毎に茂吉の墓に詣つるをならはしとして五月十四  
「齋藤茂吉追慕歌集」平成八年

先にも述べたが、茂吉の命日は二月二十五日である。右の歌に毎年五月十四日に茂吉の墓に詣でるようになっているとあるが、この日は茂吉の生まれた日である。この墓が山形の金瓶のを指すか、大石田に建てられた第三の墓を指すのかはわからないが、命日でなく五月を選んだのは気候がいいからだろうか。

## 楽しい時間 57

山本紀久雄

2017年6月30日

### 三遊亭円朝像…その六

落語家・立川談四楼が「本当に落語ブーム？」（日経新聞2017年4月30日）と疑問を呈し、「二部の落語家だけが忙しい」「地域寄席に限っている」と述べたので、それらの実態を確認しようと、上野の定席「鈴木演芸場」に行ってみたら、閑古鳥状況であることを前号でお伝えした。だが、ひとつの定席で、それも一日だけの客席数で判断するのは問題なので、別の定席「浅草演芸ホール」に6月12日（月）に行ってみた。

窓口でチケット買うと「昼の部がもうすぐ終わりますが、中で立ち見できます」とのこと。ドアを開けてびっくりした。何と「昼の部」は満席である。

しばらく立ち見して「夜の部」との入れ替え時間に、ゴミを集めに来た係の若者に「すごいですね。満席で…」と聞くと「人気者が出ていますから」とニコッと笑う。

プログラムで確認すると、やはり春風亭二之輔が演じている。これが要因かと思いつつ、「夜の部」の観客席を見回すと、これも七割がた埋まっている。再びプログラムを見ると大相撲で大関に昇進した高安そっくりの丸顔・桃月庵白酒の名がある。前にお伝えした4月11日のめぐろパーシモンホールの「気になる三人かい」・柳家喬太郎・桃月庵白酒・春風亭二之輔」の中の二人が昼夜と出演しているのだ。

この日のマジック出演者「アサダ二世」が、「月曜日の夜の部は大体ヒマですが、今日は入っていますね」と壇上から解説し

たように、考えてみると、人気者登場で観客数は変化するので、一概に定席が閑とか、忙しいとはいえないのが実態であると、当たり前であるが判断した次第。

そういえば、昨年1月3日、地元の新聞販売店から「落語会」開催のチラシが郵便受けに入り、希望者は電話してくれというので申し込みし、当日、会場ホールに行ってみると、2500席がほぼ満席。この時は、人気者の春風亭小朝と三遊亭円朝ということだから、これだけ大勢集まったのかと推測したが、どうも、やはり、「鈴木演芸場」や「浅草演芸ホール」でも人気者が出演すると客が入るので、落語ブームとは「落語家ブーム」のことではないかと思えてきた。

『円朝の女』（松井今朝子著）を読んだところ、最後の章で小朝と著者が対談していて、小朝が次のように語っている。《今、落語ブームといわれるんですけど、そうじゃなくて落語家ブームなんです。人気のある噺家の独演会にお客が集まっているだけで、母体である寄席の客がさほど増えていない》と。この小朝発言は『オール読物2009年』の引用で、今から8年前だから、当時から「落語家ブーム」と見抜いていたのだろう。さすが小朝と思う。

ところで、先日、「洪沢史料館」を訪れ、開催中の「洪沢栄一・パリ万国博覧会へ行く」について桑原功一副館長から詳しく解説をいただき、洪沢の活躍について理解したが、その際、円朝と洪沢の関係についても説明があった。

それは、15代將軍徳川慶喜が、幕府崩壊後、駿府にて過ごしていた明治26年1月2日、洪沢が、その妻と共に、円朝を連れて駿府まで年始に訪れているとのこと、早速『徳川慶喜家扶日記』（前田匡郎編著）でこの事実を確認した。

駿府の慶喜公のもとには鉄舟が度々訪れているが、鉄舟亡き

後「日本資本主義の父」ともいわれる洪沢が、鉄舟の禪弟子である円朝を駿府まで案内していたとは・・・。

洪沢、鉄舟、円朝の關係は大変興味深く、この経緯について後日お伝えしたい。

さて、天皇陛下下の退位を実現する特例法が成立し、政府内の準備がこれから本格化するが、中でも国民生活に様々な形で影響するのが新元号の制定である。天皇代につき二つの元号を定める「二世二元」の制度を定めた明治以降、退位による改元は初めてである。明治

への改元は、明治天皇が即位した慶応四年（1868）8月27日の翌月9月8日になされた。「明治」という出典は「易経」の中に「聖人南面して天下を聴き、明に嚮（むか）いて治む」という言葉の「明」と「治」をとったもので、聖人が南面して政治を聴けば、天下は明るい方向に向かつて治まるという意味で、新しい元号が公表される前日、天皇は自ら内侍所（ないしどころ）（賢所）に赴き、二二三の候補の中から、クジで決めたといわれている。

明治元年、円朝30歳。円朝はこの年の秋、父の知人である茶船乗の親分武蔵屋徳松のすすめで、大代地（浅草旅籠町―台東区柳橋2丁目）へ移転し、徳松が経営する浅草茅町の寄席武



蔵野に出て、両国に劣らぬ盛況を得ていた。時代の世相変化が影響したのか、円朝の「まくらに振る」内容に少し変化が見られてきた。

森鷗外の『洪江抽斎』に、円朝が洪江抽（しぶえちゆう）斎（さい）の娘・陸（くが）のことに触れたとある。

《或日また五百（いお）（注・抽斎の妻）と保（注・末子）とが寄席に往つた。心打（しんうち）は円朝であったが、話の本題に入（い）る前に、こういう事を言つた。『この頃緑町では、御大家のお嬢様がお砂糖屋をお始になつて、殊の外御繁盛だと申すことぞございます。時節柄結構なお思い立（たち）で、誰もそうありたい事と存じます』といった。話の中にいわゆる心学を説いた円朝の面目が窺われる。五百は聴いて感慨に堪えなかつたそうである》

洪江抽斎とは弘前藩津軽家の家臣であつたが、維新後、四女陸が本所緑町稲葉家門脇の空き地に小屋を建て、独力で砂糖屋を開業、これを円朝が高座で取り上げたのである。

円朝が語つたその当時の心理を推測するならば、「土族出の若い娘の商法」というキーワードが心に響き入つてきたのだろう。大きな時流変化が押し寄せている時、それに対応すべく、懸命に努力している若き娘の土族ビジネスを知り、そのことを世間一般大衆に向かつて伝えることで、時代への感覚を磨くことが必要だといふ、当時の円朝にとつて素直で自然な言の葉だたと思ふ。

それはまた、変わりゆく時代を生きて行かねばならぬ旧江戸人である自分、それへの励ましであつたのかもしれないが、結果として、この「まくらに振る」話が洪江一家にとつて力強い激励となつて、鷗外を通じて後日に語り伝えられるようになったのであるから、後年、世相を語つた円朝高座につながつてゆくひとつの起点であつたと思ふ。円朝研究続く。

漢詩研修 (十)

千代田岳精会 平井茂行

秋思

張

籍

洛陽城裏秋風らくようじやうりしゆうふうを見るをみ

家書かしょ作つくんと欲ほつしてい意い万重ばんちゆう

復恐またおそるそ匆匆そうそう説き尽くさきごるを

行人こうじん発はつするに臨のぞんでまた又封またふうをひらく開く

洛陽城裏見秋風

欲作家書意萬重

復恐匆匆説不盡

行人臨發又開封

【作者】

張籍（七六六？～八三〇？）中唐の詩人。字は文昌。安徽省和県の生まれ。七九九年に進士に及第、秘書郎・水部郎中・国子博士を歴任し、国士司業に終わった。韓愈に認められて文学改革運動に参加、世に「張籍」と併称された。また、新樂府運動も積極的に推進し、王建と並べて「張王の樂府」と称されている。白居易も張籍の作に敬意を表したという。新樂府に熱心であったとは言え、張籍の詩は決して理念先行形ではなく、むしろ人間感情の微妙な動きを巧みにとらえる点に特色がある。

【語釈】

○秋思：秋の物思い ○洛陽：唐代で長安に次ぐ都 ○城裏：街中 ○家書：手紙  
○秋風を見る：秋風の吹くのを感じて故郷を思い出したことを言う  
○意万重：思いがあれこれ重なること  
○匆匆：あわただしいこと  
○説きつくさざる：言い残しがある

【通釈】

○行人：旅人、此処では手紙を託そうとした人  
洛陽に滞在するうち、何時しか街中に秋風が吹くようになって、故郷のことがしきりに思い出されてくる。そこで家族に手紙を書こうと筆をとってみたが、積もる思いがあれこれわいてくる。急いで書いたので書き残したことが無いかと、また気がかりになり、手紙を託す人が出発する間際になって、もう一度封を開いて見直してみた。

【鑑賞】

この詩の前半は、故郷に手紙を書く者の心境を詠じ、後半は手紙を託す前の心境をよく伝えている詩ではないか。また、秋の気配を感じるのに「秋風を聞く」とか「肌で感じる」という表現ではなく、「秋風を見る」と表現したのはさすがである。

【注釈】

○秘書郎：宮中の書庫の管理役  
○水部郎中：堤防、水運、灌漑の管理  
○国子博士：教育行政を兼ねた国立学校の教授  
○韓愈：中唐の文人・詩人

## 雑草の名前

### 夏 目 勝 弘

人間が識別するための、地球上のあらゆるモノに名前が付けられている。

新種が発見されると、先ず名前が付けられる。雑草においても変りがない。

どのような規準があるのか知らないが、雑草の名前を見ると、人間の身近な物や出来事そして名付者の思いや感じたことによつて、名前が決められているように思う。

雑草の名前で多いのは、犬、雀、鳥、馬、牛、狐、兎、豚、鰻、蚤、等々まだあるが、特に多いのは犬、次は雀である。

そして何故かアメリカの付く名前も犬に次ぐ多さである。これらは一部でしかない。

また雑草でしか付いていないような、かわいそうな名前の雑草を、次に書き出してみる。

ヘクソカツラ、ヤブジラミ、ママコノシリヌグイ、ワルナスビ、オオミノフゲリ、ハキダメギク、ニワホコリ、等々。

そのなかから（雑草手帳・稲垣栄洋著）より一部を転記してみる。

ヘクソカツラ。別名（早乙女花・やいと花馬食わず）大きさと蔓性で高く伸びる。花言葉（人嫌い、意外性のある）。

名前の意味は（屁糞かずら）で悪息を放つことから名付けられた。

万葉集巻16 38855（高宮王の数種の物を詠み込んだ歌の二首）の一首。

○さいかちにはひほどれる糞かずら絶ゆることなく宮仕せむ  
別名（早乙女花）悪臭だが、花はかわいらしいので、諺に（屁糞かずらも花盛）と

悪臭を溜めこむ虫にヘクソカツラヒゲナガアブラムシ」という害虫はヘクソカツラの悪臭を体内に溜めこみ、外敵から身を守る。  
ハキダメギク（牧野富太郎博士が、世田谷区のコミ捨場で発見したため）

世界中で広がっている雑草はコスモポリタンと呼ばれる。  
英語名は（勇まじき戦士）イギリスでは（キユー植物園の雑草）

花言葉（不屈の精神）  
ブタクサ（豚が食べるから）原産地アメリカ花言葉 幸せな恋）

花粉症の原因、スギ・ヒノキにつづいて二位（マッカーサーの置き土産とも言われる）

クズ（別名うらみ草）花言葉、活力芯の強さ、治癒、昼寝をする（夏の日盛りは葉を上へ立てて閉じる。夜は葉が水分が逃げないため逆に葉を垂らして閉じる）

安倍晴明の母親が清明に残した歌

○恋しくは尋ねきてみよ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉）別名うらみ草の由来

土壌侵食防止のためアメリカが導入したが強害草となつている。日本でも強害草の一種であるが、食糧、薬草として雑草で一番多く人間に利用されている雑草でもある。

葛布・質強く水に耐え雨具に、袴に、襖などを貼るに用いる。掛川の名産。

食品葛粉（クズの名は、大和の国の国柄こころがらが葛粉の産地に由来）薬草（根の皮を乾燥したものを、カクコン（葛根）と呼び、

漢方で発汗、解熱、緩和薬、健康な人の頭痛、肩こりをとともなう感冒に卓効す。

カクコン湯は感冒のほか、乾性の皮ふ病、小児はしか、神経痛、結膜炎、大腸カタル、じん麻疹。

クズデンプンは滋養剤、結合、崩かいが良いため良質の錠剤賦形薬となる（保育社・薬用植物図鑑より）

# 「氷魚」のことから (19) 岡本八千代

今や将棋界が高調している。将棋の竜王戦決勝トーナメントで、増田康宏（19歳）四段と、29連勝を懸けた藤井聡太（14歳）四段が対局した。——ついに、26日夜更けて、藤井四段は29連勝を遂げた。

この驚きの中で、私は「木屑録」のこと書こうとする。「木屑録」の中には詩が十四首。近体詩というのが十二首、古体詩が二首である。近体詩は七律（七言律詩）三首、七絶（七言絶句）九首。過半が七絶から成っている。○旅の終わりに作ったという七律について。

・「客中憶家」 「客中、家を憶う」

北地天高露若霜 || 北地、天高くして、露、霜の若く  
客心蟲語兩淒涼 || 客心、虫語、兩つながら淒涼  
寒砧和月秋千里 || 寒砧、月に和して、秋千里  
玉笛散風淚万行 || 玉笛、風に散じて、涙万行  
他国乱山愁外碧 || 他国の乱山、秋外に碧に  
故国落葉夢中黃 || 故国の落葉、夢中に黄なり  
何当後苑閑吟句 || 何か当に後苑に閑に句を吟じ  
幾処尋花徒繡牀 || 幾処か、花を尋ねて、繡牀を徒す

べき

二十三歳の青年漱石が夏休みの旅行中に作った作。果

たして今の青年たちはどんなのであろうか。「漱石の夏休み」の著者高島俊男氏は、「これはまったく晩秋の景色である」「これは他郷に何年も十何年も住んでいる人の感慨である」また、「なんとなく多少の色気を連想するというしかけになっている」とか、「今は他郷で役所の長官かなにかをしていて、晩秋の風物に望郷の念をつのらせているが、任あけて帰郷すれば美しい女たちが待っているような、そんな雰囲気になっているのである」と評している。どんな美しい女たちのことか？「幾処尋花徒繡牀」と歌ったものだから、「豪勢な町のどこかで、美しい待女かなにかが、刺繡のついたきれいな布でおおった床几を、『だんなさま、このあたりがよろしうございますか』と動かしているような——」と著してある。……女性の私には、ちよつと空想できない。漱石のユーモアがちらつと表現されているのかもしれない。

子規は、「寒砧和月秋千里」の一句に感心したと言われている。「秋千里」は杜甫の『萬里悲秋』あたりにヒントを得たのか？と。きぬたの音が冷めたい月にひびいて、いきなり『秋千里』と展望がひろがる飛躍に驚いたと。

これから日本も秋になれば、これら漱石の漢詩にも心動かされることだろう。

（「漱石の夏やすみ」高島俊男著を参考）

## 「歴代天皇御製歌」(七十八)

賈名海屋資料館

「後桃園天皇」第百十八代・在位一七七〇年(十三歳)―一七七九年(二十二歳)

後桃園天皇は、桃園天皇の第一皇子。在位のまま二十二歳でなくなられた。御歌は少数。

後桃園天皇の十年間の在位の間、日本の近海をめぐる状況は、一七七七年、ロシア人が千島列島の国後島に来る。イギリスは産業革命の只中にあり、アメリカ大陸においては、独立戦争が、フランスでは大革命が勃発。

西欧に近代が確立され、新たな世界史の時期となった。

のどかなる春を迎へてさまざまの道榮えゆく御代ぞにぎはふ

迎春祝代(十三歳)

いと早も春を告げてや我が国に今朝のどかなるうぐひすの聲

内裏和歌御会

## 「歴代天皇御製歌」(七十九)

貫名海屋資料館

「光格天皇」第百十九代・在位一七七九年(九歳)―一八一八年(四十七歳)

光格天皇は、第百十三代・東山天皇の曾孫に当る。この御代、第十一代将軍・家斉。松平定信が老中となり「寛政の改革」といわれる。

本居宣長が「古事記伝」を完成。平田篤胤の国體の本義、頼山陽の「日本外史」。塙保己一が「群書類従」「続群書類従」。伊能忠敬、蝦夷地測量をはじめ。間宮林蔵、樺太探検、イギリス軍艦不法に長崎に侵入。イギリス船が常陸へ、ロシア船が蝦夷へ、イギリス船が琉球に来る。

こむらさき咲きにほひけり葦草うすみどりなる野辺の芝生に

(十六歳)

いく千年たえせぬ秋の月とともに曇らぬ御代をあふぐもろ人

秋祝(十六歳)

おもはじと思ひかへせばあやにくになほ立ちそひぬ人の面影

おもかげ(二十七歳)

## 編集室だより【二〇一七年六月】

りでしたらご案内致します。

### ○深大寺吟行

奈良時代、天平五年に「満功上人」が唐へ渡り、法相宗を学び帰国、深大寺を建立された。白鳳期の、国宝釈迦如来倚像。ペット達が手厚く供養されていて、おだやかな、安らかな、ほっとする雰囲気。荒川と多摩川に挟まれた、国分寺涯線に添う武蔵野の湧水、木々草々：豊かに空気を吸い込んだ。

### ○アヴァンセ・コンサート

シャンソン歌手であり、俳句のお仲間の、やまざき礼子さんと松戸しのおさんとのコンサート。ご一緒に吟行する時と、ひととき異なるお二人に、びっくり、感心、よろこびのコンサートをありがとうございます。

○時は逆のぼり、小学校一年生の時から、同じクラスだった南部君から連絡があった。南部君の家は、三河湾の波打際に建っている美しい風景だった。十三号台風がきて、その家が流されてしまい、再建して、伊勢湾台風がきて、また家が流されてしまう。そして、どこに引越したのかわからなくなっていた。

東京の夜景を見渡すレストランにて、一升瓶「瀬祭」をたちまち呑み干す昔話。

○鉄舟会主催「渋沢史料館」見学&飛鳥山史跡巡りに参加。

徳川将軍の「日光御成道」岩槻街道の道端に住んでいる思いを新にした。

岩槻街道の登り口に室町時代末期よりここに立たれる子育地藏尊には、毎日のお参を欠かさない。

○毎日の行き帰りに、境内を通らせていただいている王子神社は、紀州熊野より王子大神を迎えられた。

○八代將軍吉宗公は、紀州徳川家の出自のご縁により、飛鳥山を寄進され、桜を植え、庶民の為の遊樂の地とされた。

○日本の近代経済の基礎をきずかれた「渋沢栄一」の事業の諸資料を展示する「青淵文庫」「晚香廬」「暖依村荘」。

○明治の元勳、陸奥宗光の邸宅「旧古河庭園」。ジョサイア・コンドル博士の設計が西洋だ。美しい庭園には絵を描きにゆく。まだまだ書ききれない。興味があ

## 野菜の花 (14)

鈴木孝雄



○ モロヘイヤ

食材の対象は若葉なので、花を觀賞することはなかった。本稿のため写真撮ってみると、黄色の花はなかなか可愛い。花言葉はずばり「健康回復」。

モロヘイヤは最強の緑黄色野菜。ビタミン類では、癌や成人病の予防効果があるβカロチンが極めて高い。ハウレンソウに比べ、ビタミンB2は約21倍。また、カルシウムは約7.5倍。刻んだり茹でたりすると出てくる粘りには水溶性の食物繊維を多く含んでいる。まさに夏場に好適な野菜と言える。

原産地はインド西部あるいはアフリカで、主産地はエジプトなど中近東とアフリカ。エジプトでは約7千年前から食べてきた歴史がある。その昔ある王様がモロヘイヤのスープを飲んだところ、それまで苦しんでいた病が治ったため、その野菜をムルキーヤ（王様達の物）と呼ぶようになった。それがなまったMolokheiyaが日本名モロヘイヤの語源である。

モロヘイヤの別名はシマツナソ（縞綱麻）、近隣種のコウマ（黄麻）と共に茎は繊維原料となる。ジュート（jute）と通称される。生産量はワタに次ぐ重要な天然繊維である。

5月に種まきする。発芽率は高く、6月には間引き株がもう食用になる。盛夏は食用の葉を増やすため、花はなるべく摘み取ってしまう。しかし10月になると花が優勢となり、葉が硬くなるのでシーズンは終了。花はやがて種をいっぱい含んだ鞘となる。じつはこの種は有毒と言うことを最近知った。まさに毒と薬は紙一重だ。

今回はマンガンジトウガラシ（万願寺唐辛子）の花の予定です。

## お知らせ

△九月号の原稿は、七月三十一日(月)までに、必着、郵送ください。

※毎月々の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考え、早目に送付して下さい。

※原稿の返却を希望される方は、毎月原稿の返却・希望とお書き下さい。

三河アララギ誌発送に同封します。

▽原稿の送り先

東京都北区王子本町一の一六の六A

〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

## 「三河アララギ」について

◇三河アララギ誌・毎月発行。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制・廃止。既納会費は返却致しません。

◇これから講読を希望される方。一ヶ年分、四千円。振替口座〇〇八三〇一六―五六二二九。

◇会員、会員以外の方に執筆をお願いすることがあります。

◇短歌・俳句・論文・随筆など送稿することができます。

◇発行所開催の諸行事にどなたも出席出来ます。

◇三河アララギ発行所・〒一四一〇〇二二

東京都北区王子本町一―二六―六A

TEL・(〇三)五九二四―二〇六五

◇URL・E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

◇編集・発行・今泉由利・森岡陽子

◇印刷所・株式会社 桜創美